

Hikari Ichihara

わずかでもみなさまの心に暖かい光が灯りますよう  
信頼する3人とともに、心を込めて演奏いたしました。  
この素晴らしい機会と人生に感謝します。

I put all my heart into recording this album with the musicians  
who I absolutely respect and trust. I hope you like our music.  
I am so happy to have this opportunity and this wonderful life.

市原 ひかり

Hikari Ichihara

Special Thanks : Hidefumi Toki, Jun Miyakawa, Akiyoshi Shimizu,  
Kazuaki Yokoyama, NARU, Akiomi Hirano, David Negrete,  
Midori Ichihara, Yoko Takamatsu and God

1. Anthem
2. Urim & Thummim
3. Just Fade Away
4. The Thinker
5. He'll Know
6. CLC
7. Repetition
8. Revive

All compositions written by Hikari Ichihara

Produced by Akiomi Hirano

Recorded at NK SOUND TOKYO  
on 17, 18 November 2020  
Recorded & Mixed by Neeraj Khajanchi  
2nd Engineer: Yuuki Hosoda  
Mastered by NK @ AQQA Mastering



Art Direction & Design : Hiroshi Kurisaki  
Photograph : Takeo Hibino



市原ひかり  
Hikari Ichihara :  
trumpet & flugelhorn



宮川純  
Jun Miyakawa :  
piano



清水昭好  
Akiyoshi Shimizu :  
bass



横山和明  
Kazuaki Yokoyama :  
drums

# 個性を引き受ける覚悟

「ひかりちゃんって、音がきれいだね」。

市原ひかりの音楽人生を決定づけた一言がこれでした。中学1年で吹奏楽部に入ったばかりのころ、右も左もわからずロクに吹けもしなかったのに、高3の先輩にそう言われたのです。とてもきれいな音を出す女性のサクソ奏者でした。

とつぜんのことに驚きながらも、なにか啓示を受けたように感じた彼女は、反射的に「きつと音色がわたしの持ち味。それを大切に生きていこう」と心に決めます。市原ひかりがトランベッターとしての“スジ”を見定めるきっかけになった出来事であり、表現者としての個性が静かに胎動をはじめた瞬間でした。

知的なブレス、独特のタイム感、クールな歌心、豊かな表現力……。彼女の魅力を挙げればキリがないけれど、ひとつに絞れと言われたら、ほくなら迷わず「唯一無二の音色」と答えます。

市原さんの美しい音色に驚嘆した日のことを、ほくはいまも忘れることができません。いつものように六本木のジャズクラブ「アルフィ」で土岐英史クインテットを聴いていたときのこと。最前列で彼女の音を浴びているうちに、かつて経験のない感覚が押し寄せてきたのです。なんて美しく凛々しい音なんだろう。身体からだのなかにジワジワと感動が満ちていきます。

不思議な感覚でした。それまで何度も見てきたのに、とつぜん眼からウロコが落ちるように彼女の凄みを感知したからです。身体からだのなかを実感が通り抜ける、まさに“腑に落ちる”体験でした。

トランベットの真骨頂は、空気を切り裂くハイノートであり、最前線でバンドを鼓舞する熱気と情熱のブレスだ。ジャズファンの多くは、半ば無意識のうちにそう刷り込まれていることでしょう。じっさいほくもそうでした。しかしあの日、トランベットの真価が“突撃ラッパ”だけではないことを、市原ひかりが身をもって教えてくれたのです。

彼女が放射する分厚く、艶やかで、生命感あふれる中音域が空間全体を美しく満たしていく。いつかそんなアルバムをつくろう。あの日、そう心に刻みました。最近の彼女はシンガーとして新たなフィールドに踏み出しているけれど、あえてそれを封印して“美しく凛々しい音”だけにフォーカスする。それがトランベッター市原ひかりの最大の魅力であり、最大の個性だと考えるからです。

市原さんの魅力を最大限に引き出すには、“ホーム”にいる彼女をありのままに打ち出すのがいちばん。音楽的にも人間としても信頼できるメンバーたちと演ることが、彼女の個性を発露させる最善の道。そう考えて、今回は「レギュラーバンド」「全曲オリジナル」に決めました。

「あの3人だとリラックスできる。緊張がほぐれてブレスができるから、しっかり息を吸って、バーンっていい音で吹ける。波長が合うっていうか…美意識や空気感を共有できるから音がブレンドする。きつと音楽のうえでも人間的にも最高に相性がいいですね」「しかも3人からどんどんアイデアが湧き出てくる。知らない世界にわたしを連れ出してくれる。だからわたし、みんなにこうしてああしてなんて、1回も言ったことないんです。とにかく自由にやって欲しい。なにも決めたくないし、どんどん変えてくれていい。だってそのほうが楽しいでしょ?」。

メンバーに対する無条件の信頼。市原ひかりの統率原理はきわめてシンプルです。むろんそれはメンバーの意識に作用します。清水昭好は「リーダーとして心から信頼している」と言い、宮川純は「それだけ信頼してもらっているからこそ、自信をもって“いまの自分”をナチュラルに出せる」と言います。

横山和明はバンドのありようをこう表現しました。「どのように解釈するか、どうやって広げていくかはひとつじゃない。だから完成形を決めつけない。それができるのは、どんな解釈でどんな方向に行っても、ちゃんとこのバンドのサウンドになるという信頼

関係があるから」。

特筆すべきは、このバンドがじっさいに市原ひかりの魅力を最大限に引き出し、彼女が個性を発露させるうえで最上の環境を提供していること。音を聴けば一目瞭然です。彼女のいちばん美味しいところが生きるサウンドになっている。みごとです。

それにしても、リーダーはなにも指示せず、メンバーそれぞれが“いまの自分”をそのまま出しているだけなのに、バンドの個性を確立しているのはなぜなんだろう？ 脳裏に浮かんだのは、グラフィックデザイナー・佐藤卓の言葉でした。

「個性とは、出すものではなく“出ちゃう”もの」。個性はだれにでも自然のうちに備わっているものだから、余計な心配なんかしなくていい、そのまま出しちゃえばいいんだと。「やるべきことを徹底的にやっていたら、おのずと個性は出るはずなのに、若い人は無理やり出そうとがんばっちゃう。由々しきことだ」。卓さんはそう言います。

かつて市原ひかりからおなじ話を聞いたことがあります。「わたしの音色は訓練の成果でもなければ、作為的につくったものでもないんです。ただ自然に、ナチュラルに“出ちゃってる”だけ」。

そして最後にこう打ち明けてくれました。「音色が個性的だと言ってもらえるのはすごく嬉しい。でも自分の音がイヤになることもあるんですね。まあ、出そうと思って出しているわけじゃないから、考えてもしようがないんだけど…(笑)」。

市原ひかりは“自分だけの音”をもつ One & Only のトランベッターです。

彼女の音はだれにも似ていないし、だれも真似できない。特定するには数秒あれば十分で、ブラインドテストをされてもまず間違えることはないでしょう。カルロス・サンタナのギターとおなじです。

ミュージシャンならだれしもそんな“自分だけの音”を目指しているはず。しかしそれを獲得できるのはほんの一握りのプレイヤーだけです。努力だけで手に入るものなのか、あるいはある種の天才が不可欠なのか、ぼくにはわからないけれど、ひとつだけたしかなのは、そこに到達した瞬間にステージが変わるということ。その最たるものは競合がないということでしょう。その音を聴きたければそのミュージシャンを聴くほかないからで、いわば独占企業のようなもの。

しかし、これを逆から見れば、その音が求められていないときには選ばれることがない、ということでもあります。要望どおり器用に演奏できるスタジオミュージシャンとはそこがちがうところで、たんに演奏技術を提供する「職人」ではなく、人格をとまなう「存在」として認知されている以上、とうぜんそうなります。

ゆえに「好き嫌い」から逃れることができない。それが One & Only のステージに立つ表現者の定め。万人に好かれる個性など存在しないからです。

市原ひかりはまぎれもなくその地平に立っている。しかも腹を括ってその立場を引き受けているように見えます。オリジナル曲もバンドサウンドも、すべてが彼女の「唯一無二の音色」を端的に表現するために存在していることを見ても、それはあきらかでしょう。

この潔さこそ、彼女の強度の源泉だとぼくは思います。いわばミュージシャンとしての天分に殉じる覚悟のようなものです。

市原ひかりの音はやわらかく気品があるけれど、けっして甘くはありません。生ぬるい“癒し系”でもなければ、甘ったれた“キレイ”でもない。

美しい音色の奥にある種の凄みが潜んでいるからです。その正体はおそらく「個性を引き受ける覚悟」にちがいない。ぼくは密かにそう考えています。

平野 暁臣 (Days of Delight)  
Founder / Producer